

## こころの相続

約40年ぶりに相続法が改正されたからでしょうか、五木寛之さんは、これまでほとんど縁のなかった経済団体や新聞社主催の経営セミナーなどで、「相続」に関する講演の依頼を受ける機会が増えているのだそうです。なかには何時間もプログラムされたセミナーの一部で、竹中平蔵さんなどと名前が並んでいることもあるのだと言います。

法律や経済の専門家の話の「箸休め」としての役割を期待されているのだと考えながら、北朝鮮からの引揚者で早くに両親を亡くした五木さんは、「自分は両親から何を相続したのだろうか」と自問するのだと、著書『こころの相続』（SB新書）で述べています。

土地や株などの物質的な財産だけではない、目に見えない財産を相続することも「相続」に含めて考えるべきではないか、と五木さんは語ります。教育者であり武術家でもあった父親は、古事記を暗唱させ剣道の朝稽古を強いる厳しい人でしたが、ときおり深いため息をつくことがあったのだそうです。農家の次男として生まれ、教育者として身を立て出世しようとしていた父親の、心の奥底を垣間見る思いだったのでしょうか。五木さんはそのため息の重さが、生きる勇気を与える大事な土台になっていると述懐しています。そして早世した父親と、どうしてもっと話をしておかなかったのかと悔やむのだそうです。

人から受け継いだもので、本当に人生を支えてくれているものといったら、目に見える財産などではなく、仕事に対する向き合い方であったり、日々の生活の中での後ろ姿であったりするのだと思います。

そうやって「相続」を広い意味で考えると、「引き継がせる側」も「引き継ぐ側」も、「引き継ぐこと」に対する心構えが違ってくるのではないのでしょうか。また「相続」というものに向きあう心持ちも、豊かなものになっていくのではないのでしょうか。

### ■ 文化の伝承という「相続」

文化の承継や技術の伝承も「相続」と考えれば、いろいろなものの見え方が変わってきます。すくなくとも、いわゆる財産の「生存贈与」の熱心さを、もっとほかのことにも振り向けるべきではないか、などと自戒を込めて思います。

そんなことを考えていて、最近の出来事をしみじみと思い返しました。

新型コロナウイルスによる非常事態宣言が解除されて、茶道の稽古が再開された時のことです。ふだんは大人数で行う稽古を、時間を分割したうえ、二人一組、「一客一亭」の交代制に組み直していただきました。大人数での接触を避け、濃茶の回し飲みによる感染リスクを避けるためです。

稽古場の待合には、短冊に次の句がしたためられていました。

卯の花を かざしに関の 晴着かな

『おくのほそ道』に収められている芭蕉の弟子 曾良が白河の関で詠んだ句です。可憐な白い卯の花を髪飾りにして装いを改めれば、関所を越える先人の晴れ着のようだと詠んでいます。

芭蕉と曾良が白河の関を訪れた時には、すでに関所の跡もなく、卯の花や白い茨の花が咲くばかりの野道でした。いにしえの旅人が、かつてこの場所で詠まれた秀歌に敬意を表して晴れ着に着替えたエピソードを、曾良は俳句を通してよみがえらせたのです。

稽古の準備が整い、稽古場の茶室に入ると、床柱には、備前焼の花入れが掛けられており、その中で「卯の花」がこうべを垂れています。備前焼の花入れの銘は「旅枕」ですので、茶室のしつらえが「旅」を意図していることは明らかです。

二人一組の稽古は、芭蕉と曾良の二人道中を連想させますし、「旅枕」から顔をのぞかせる卯の花は曾良の句をそのまま表しています。白河の関に当たるものは、さしずめ非常事態宣言による「外出自粛要請」でしょうか。

これから二人一組で、関所を渡ることになる、それは長く厳しい旅になるかもしれないけれども、いまは気持ちを新たにして一步を踏み出そう。そのような師匠からの励ましの気持ちを汲み取りました。

## ■ 本歌取りという「相続」

和歌には「本歌取り」という手法があります。本歌の一部をとって新たな歌を詠み、本歌を連想させて歌にふくらみを持たせる技法ですが、これも広い意味での「相続」と言えるでしょう。

曾良の句も、過去の秀歌に敬意を表して装いを改めたというエピソードを受けて、一句のなかに時間の広がりを持たせています。先日の茶室のしつらえは、さらにコロナ禍の厳しい状況を、関所を越える旅立ちになぞらえることで、時間の幅を折り込むものでした。

文化の伝承、相続というものは、こうやって過去の業績を受け継ぎながら、それを重層的に折りたたんで、さらに豊かなものにする営みではないかと思います。

「相続」という言葉には、排他的で、どこか人の心をすさませる寒々しい響きが付きまといりますが、こうして広い意味で相続をとらえるならば、そこには人の営みの豊かさを重ね合わせる温かみ加わります。

引継がれる側、引き継ぐ側の両方が、共働で組み立てていく作品という見方もできるかもしれません。

(所長 瀬戸 英晴)